大学生におけるソーシャルスキルと大学適応との関連

武　蔵　由　佳

【問題と目的】

大学生活の中で、友だち関係がうまく展開できない、居場所がないなどの対人関係に関する問題や、精神的な諸問題を抱える学生、修学上の問題を抱える学生が増えていることが指摘されている（文部科学省、2008）。さらに近年では、超就職氷河期にあり、就職や将来の進路に不安や悩みを抱える学生が増えており、実際に大学卒業者の１割強が就職も進学もしておらず、学生の社会・職業への移行が必ずしも円滑になっていないという現状もある（文部科学省、2008）。日本においては大学の４年間が高等教育の場としてのみならず、学生が身に付けるべき社会人としての基盤づくりのための準備期間としても位置づけられていることから、大学生の在学時の適応と卒業後の社会への適応が関連する可能性を含めて、学生を支援していく必要があると考えられる。

大学への適応に関して、植村・小川・吉田（2001）は、大学生活の満足感には、友人関係の満足感と教官への肯定的態度、一般教養習得感や大学への同一性や居場所感が関連していることを指摘している。さらに植村ら（2001）は、大学入学時に大学への満足感が高かったが卒業時に不満足感が高まった学生の様相として、学問に興味や関心があり入学し、実際学習によく取り組み、教官にも親近感を持っているが、友人関係が進展しなかった可能性について指摘している。つまり、学問をする場所としての学部には同一性を持てるものの、大学そのものには同一性を持つことができず、最終的に大学生活の満足感が高まらなかった可能性があることを推察している。したがって、大学への適応には友人関係を広げたり、深めたりする側面が重要であると考えられる。

対人関係に影響を及ぼす重要な変数としてソーシャルスキルがあげられる。ソーシャルスキル（Social skills）とは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念である（相川、1996）。一般にソーシャルスキルが低いと、対人不安や孤独感、抑うつの様相が強くなり（相川、2000；相川・藤田、2005）、他者との関係性においてもソーシャルサポートの少なさ（渡辺、1994）や、対人劣等の強さ、対人関係における深化回避（橋本、2000）と関連していることが指摘されている。反対に、ソーシャルスキルが高いと対人関係が良好であり、自分は相手によい印象を与えているという自負を持っていること、またソーシャルスキルの自己評定の高さは他者評定の高さと一致していること（谷村・渡辺，2008）も明らかになっている。したがって、ソーシャルスキルの量的な不足が精神的な不健康や対人関係のとりにくさに影響を与え、ソーシャルスキルの量的な充足が他者との関係性における自信となっていることが示唆される。

また、ソーシャルスキルには、①学習される、②対人関係の中で展開される、③他者との相互作用の中で個人の目標達成に有効である、④社会的に受容される（庄司，1991）という特徴があることから、大学教育においても学生にソーシャルスキルを学習させることは、学生の対人関係の改善に役立つと同時に、不適応を予防することにつながると考えられる。

対人関係の形成や維持に関して必要なソーシャルスキルについて、河村（1999、2011）は、小学校、中学校、高校などの学校生活で適応

するためには、他者への思いやりを表す配慮のソーシャルスキルと、他者へ能動的に働きかけるかかわりのソーシャルスキルの２つが必要であることを明らかにしている。さらに、この２つのスキルはバランスよく発揮することが重要であることを明らかにしている。つまり、他者への配慮が不足している中で他者とのかかわりが優位になるとトラブルのもとになり対人関係に支障が出やすく、また他者への配慮を十分に行っていても他者とのかかわりを積極的に行えないと孤立する傾向があることが示されている。実際に、小、中、高校生の不適応を予防する方策として配慮とかかわりの両スキルを高めるためのソーシャルスキルトレーニングの取り組みが学校現場で活用されている。したがって、大学生においても、この２つのソーシャルスキルがバランスよく発揮できれば学生生活への適応を促すことが可能になると考えられる。

これまでソーシャルスキルを取り扱った研究においては、ソーシャルスキルが高いほど適応的で、低いほど不適応であるという研究が多くみられた。また、配慮のソーシャルスキル、かかわりのソーシャルスキルはそれぞれ研究が見られ、配慮に関しては渡部（2009）が、他者への配慮が精神的適応と曲線的な関係を有し、過剰に他者に気をつかうことで不適応に至る傾向があることを指摘している。またかかわりに関して、金子・平宮（2002）は、高校生の主張生と孤独感との関連について検討する中で、主張性が高い生徒は他の生徒から敬遠される可能性があることを指摘している。しかし、配慮とかかわりの両方のソーシャルスキルを同時に取り上げて研究しているものはまだない。

よって、本研究では、配慮のソーシャルスキルとかかわりのソーシャルスキルの２側面の関連を検討し、そのバランスによって大学生の適応の状態や対人関係性がどのように異なっているのかについて検討することを目的とする。

【方法】

調査対象　教職科目の「教育心理学」を受講している１大学の２年生 303 人（男子 103 名、女子 200 名）を対象とした。

調査時期　2008 年 11 月。

調査内容　調査対象の大学生に「Hyper-QU（大学版）」（河村，2010）中の「学校生活満足度尺度」への回答を求めた。学校生活満足度尺度（大学版）は、大学生活における満足度を承認得点と被侵害・不適応得点の２つの下位尺度から測定するものである。評定は「1：まったくそう思わない」から「5：とてもそう思う」までの５件法で各 15 項目から構成されている。単純加算により各因子の合計得点を算出する。また、「学校生活満足度尺度」は、承認得点と被侵害・不適応得点の全国平均値をもとに、学生を学校生活満足群、非承認群、侵害認知・不安定群、学校生活不満足群の４つの群に分類することができる。ソーシャルスキル尺度は配慮のスキル得点とかかわりのスキル得点の２つの下位尺度から学生のソーシャルスキルを測定するものである。評定は「1：まったくそう思わない」から「5：とてもそう思う」までの５件法で各 10 項目から構成されている。さらに、ソーシャルスキルを全般的に測定しており、多くの先行研究により妥当性が確認され、様々な行動指標との関連が明らかにされている（菊池、2004）、Kiss-18（菊池、1988）も同時に実施した。Kiss-18 は「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」であり、①初歩的なスキル、②高度のスキル、③感情処理のスキル、④攻撃に代わるスキル、⑤ストレスを処理するスキル、⑥計画のスキルなどを含んでいる。評定は「1：いつもそうではない」から「5：いつもそうだ」までの５件法である。得点が高いほどソーシャルスキルが高いことになる。

調査手続き　各尺度からなる質問紙を講義後に配布し、学生の協力と同意を得て実施した。

【結果】

有効回答は、記入もれや記入ミス、すべて

同じ番号に回答するなど尺度への回答に抵抗が考えられるものを除いて、大学生285人（男子96名、女子189名、有効回答率94.0%）であった。有効回答のみを分析対象とした。

1. 尺度の検討

1）学校生活満足度尺度（大学生版）

学校生活満足度尺度30項目を最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、河村（2010）により示されている承認と被侵害・不適応の2因子構造であった。各下位尺度の信頼性を検討したところ、承認の因子の信頼性係数は α = .858、被侵害・不適応の因子は α = .857であった。よって、学校生活満足度尺度の信頼性が確認された。各下位尺度の平均値と標準偏差をTable 1に示す。

2）ソーシャルスキル尺度

ソーシャルスキル尺度の20項目を最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、河村（2010）と同様に2因子構造であった。ただし、配慮のスキルの1項目が因子負荷量が低かったため項目を削除した。各下位尺度の信頼性を検討したところ、信頼性係数は配慮のスキルは α = .747、かかわりのスキルは α = .842であった。よって、ある程度の信頼性が確認された。平均値と標準偏差をTable 1に示す。

3）Kiss-18尺度

Kiss-18尺度の18項目を最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、菊池（1988）と同様に1因子構造であった。ただし、2項目が因子負荷量.40に満たなかったため項目を削除して16項目とした。信頼性を検討したところ、信頼性係数は α = .887であった。よって、Kiss-18の信頼性が確認された。平均値と標準偏差をTable 1に示す。

2. 学校生活満足度とソーシャルスキル尺度の関連

学校生活満足度とソーシャルスキルとの関

Table 1　学校生活満足度尺度とソーシャルスキル尺度の平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差
学校生活満足度尺度	承認	49.14	9.34
	被侵害・不適応	29.85	9.69
Kiss-18		48.88	9.72
ソーシャルスキル尺度	配慮のスキル	31.11	3.39
	かかわりのスキル	29.72	5.61

Table 2　学校生活満足度尺度とソーシャルスキル尺度の下位尺度間の相関係数

	承認	被侵害・不適応	Kiss-18	配慮のスキル	かかわりのスキル
承認	1	-.283***	.543***	.278***	.561***
被侵害・不適応		1	-.238***	-.204***	-.271***
Kiss-18			1	.229***	.538***
配慮のスキル				1	.297***

*** p <.001

連を検討するため、学校生活満足度尺度の下位因子とソーシャルスキル尺度の下位因子、Kiss-18 尺度の相関係数を算出した（Table 2）。結果、承認と Kiss-18 とかかわりのスキルにおいて中程度の正の相関が見られた。したがって、大学生活における承認感とソーシャルスキルとは関連していることが明らかになった。さらに、Kiss-18 のソーシャルスキルの項目は「問題解決」「トラブルの処理」「コミュニケーション能力」（菊池、2004）の下位因子に分類できると指摘されている。これらの下位因子を含んだ Kiss-18 は、かかわりのスキルに関連する側面を測定していると考えられる。

3. 学校生活満足度に対するソーシャルスキルの影響

ソーシャルスキルが学校生活満足度に与える影響を検討するために、ソーシャルスキル尺度の下位因子を独立変数とし、学校生活満足度尺度の下位因子を従属変数とした重回帰分析を行った。男女別の重回帰分析の結果を Table 3 に示した。この結果から、承認得点については、男女ともにかかわりのスキルが正の影響を与え、女子においては配慮のスキルも正の影響を与えることが明らかになった。被侵害・不適応得点については、男女ともにかかわりのスキルが負の影響を与えることが明らかになった。

4. 性別及びソーシャルスキルのタイプによる学校生活満足度の分散分析

配慮のスキルとかかわりのソーシャルスキルについてより詳細に検討するために、両尺度のバランスを検討することとした。具体的には、ソーシャルスキル尺度の配慮のスキルとかかわりのスキルの平均値をもとに得点が高い場合は H、得点が低い場合は L と判定し、「配慮のスキル－かかわりのスキル」の順に HH 群、HL 群、LH 群、LL 群の 4 タイプに分類した。性別とソーシャルスキルの各群における学校生活満足度尺度の下位尺度と Kiss-18 の得点の比較を行うため、性別（2）×ソーシャルスキルのタイプ（4）の分散分析および LSD 法による多重比較を行った（Table 4）。結果、承認得点は、性別、学年の主効果が有意であった。男子が有意に高い得点を示し、LL = HL ＜ LH ＜ HH であった（これ以降、多重比較の結果、ソーシャルスキルのタイプの 4 群間にみられた有意差は不等号（＜）で、有意差がないことは符号（＝）を用いて表す）。したがって、男女ともに配慮のスキルもかかわりのスキルも両方をバランスよく発揮できることが承認感の高さと関連していることが明らかになった。被侵害・不適応は、ソーシャルスキルのタイプの主効果が有意であり、HH ＜ HL=LL および LH ＜ LL であった。よって、ソーシャルスキルの発揮が難しい場合に、被侵害・不適応感が高い傾向があることが伺われた。Kiss-18 は、性別、ソーシャルスキルのタイプの主効果が有意であった。男子が有意に高い得点を示し、LL=HL ＜ LH ＝ HH であった。よって、かかわりのスキルと関連していることが明らかになった。以上から、配慮のスキルとかかわりのスキルのバランスが承認感及び被侵害・不適応感に関連していると考えられる。

次に配慮とかかわりのバランスと、学校生活満足度および Kiss-18 の下位尺度間の比較を行えるようにするため、各下位尺度を標準得点に換算した。そして、ソーシャルスキルによって 4 タイプに分類された学生の、学校生活満足度尺度と Kiss-18 尺度の標準得点の平均値を

Table 3　学校生活満足度に対するソーシャルスキル尺度の下位因子の影響

	承認		被侵害・不適応	
	男子	女子	男子	女子
配慮のスキル	.101　n. s.	.194　**	−.140　n. s.	−.119　n. s.
かかわりのスキル	.521　***	.464　***	−.277　**	−.228　**
R^2	.296　***	.306　***	.098　**	.075　***

*** p<.001 ; ** p<.01

Table 4　性別とソーシャルスキルタイプにおける学校生活満足度尺度および Kiss-18 尺度の分散分析

	男子				女子				主効果				交互作用	
	HH (N=33)	HL (N=13)	LH (N=27)	LL (N=23)	HH (N=58)	HL (N=41)	LH (N=33)	LL (N=57)	性差	*F*値	スキルタイプ	*F*値	*F*値	
承認	57.7 (6.09)	49.46 (8.36)	55.52 (7.93)	47.26 (10.75)	52.45 (7.59)	45.51 (5.98)	48.15 (8.24)	41.67 (8.17)	29.15 女子＜男子	***	25.24 LL, HL＜LH＜HH	***	.41	n.s.
被侵害・不適応	27.7 (9.13)	31.69 (9.25)	29.15 (10.62)	34.87 (12.12)	26.79 (9.37)	30.22 (6.50)	27.94 (8.87)	32.95 (10.04)	1.22	n.s.	6.72 HH<LL,HL ; LH<LL	***	.03	n.s.
Kiss-18	53.64 (7.48)	47.77 (7.25)	56.11 (8.55)	47.09 (11.01)	53.16 (7.15)	43.80 (9.32)	49.15 (7.65)	42.86 (9.59)	11.32 女子＜男子	**	17.21 LL, HL＜LH, HH	***	1.71	n.s.

(　　) 内は標準偏差. *** p＜.001 ; ** p＜.01

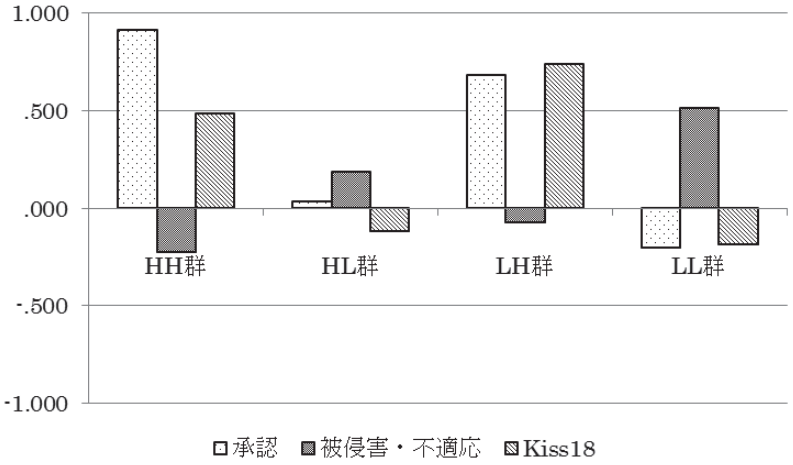

Figure 1　男子におけるソーシャルスキルのタイプ別の各得点

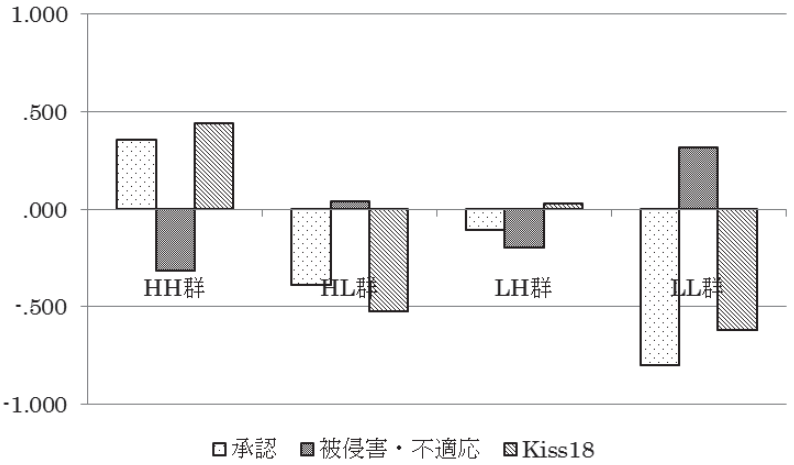

Figure 2　女子におけるソーシャルスキルのタイプ別の各得点

算出した。各タイプの特徴を男女別にFigure 1、Figure2に示す。

男女ともに、HH群は承認得点およびKiss-18得点が高く、被侵害・不適応得点が低いことが明らかになった。また、HL群は承認得点やKiss-18得点は得点が低いが被侵害・不適応得点は平均に位置していた。LH群は男女で違いがみられ、男子はHH群に近い様相を見せていたが女子は3つの変数がすべて平均に位置していた。LL群は男女ともに承認得点やKiss-18得点が低く、被侵害・不適応感が4タイプの中で最も高かった。したがって、4タイプごとに得点に差異が見られることが明らかになり、配慮とかかわりのどちらのスキルも良好に発揮できるHH群において最も適応状態がよいことが示唆された。

【考察】

1. 学校生活満足度とソーシャルスキルとの関連

学校生活満足度とソーシャルスキルとの関連を検討したところ、承認の因子とKiss-18尺度とかかわりのスキルにおいて中程度の正の相関が見られた。このことから、Kiss-18尺度が対人関係におけるかかわりのスキルに関連する側面を測定していることが示された。したがって、本研究におけるソーシャルスキル尺度は、Kiss-18尺度では測定しにくい配慮のスキルを取り扱っていることが示された。さらに、ソーシャルスキルが学校生活満足度に与える影響を男女別に検討すると、男女ともにかかわりのスキルの発揮が承認感を高め、被侵害・不適応感を低める傾向があることが明らかになった。ただし、女子においては配慮のスキルの発揮も承認感を高めることが明らかになった。したがって、男女別にソーシャルスキルの2つの下位尺度の持ち方と大学適応の関連には異なる様相があることが推測された。

2. ソーシャルスキルのバランスの検討

本研究から、配慮とかかわりのソーシャルスキルのバランスによって、承認感や被侵害・不適応感が異なっていることが明らかになった。以下にソーシャルスキルのバランスによって4タイプに分類された学生の様相と性別による違いについて述べる。

HH群（両高群）

このタイプは、配慮のスキルもかかわりのスキルもどちらも高い学生である。分析の結果、承認得点は、LL群、LH群、HL群よりも得点が高かった。被侵害・不適応得点はLL群、HL群よりも低かった。したがって、男女ともに配慮とかかわりの両方がバランスよく発揮されることが必要であると考えられる。全体的にHH群は、ソーシャルスキルが高く、学校生活に対しても適応している様相が見られた。

LL群（両低群）

このタイプには、HH群と対照的に、人に配慮するスキルと人とかかわるスキルの両方が低い学生が分類される。分析の結果、男女ともに承認得点が低く、被侵害・不適応得点が高いという特徴があった。ソーシャルスキルの活用が全般的に不足しており、その結果、友人関係の形成や集団での活動においてトラブルを抱えていたり、孤立したり、支障をきたしている可能性が高い学生である。

相川（2000）は、ソーシャルスキルの不足により、周囲からの拒否や無視を受けることが多くなり、孤独感が強くなることを指摘している。このことは具体的には、ソーシャルスキルの不足な青年は、相手に質問をしない、話題の持続性がない、会話への積極的な参加をしない、相手の話にコメントや反応をしないなど、対人場面での稚拙な対人反応となって現れ、これにより周囲が接触を避けようと無視や拒否をするようになる。自らの稚拙な対人関係により他者との相互作用を否定的なものにしているのであるが、当人は失望感や疎外感、孤独感に苛まれ、対人接触がますます少なくなると指摘している。同様に、橋本（2000）も、ソーシャルスキル（Kiss-18）の低さと他者とのかかわりの中で劣等感を誘発する事態（対人劣等）を頻繁に経験する度合い

が密接に関連していること、また、ソーシャルスキルの低さと対人関係における深化回避との関連を指摘している。したがって、この群の学生は他者との関わりそのものからの退却を示し、承認感の低下や被侵害・不適応感の増大が起こること、また孤独感や抑うつ感情など精神的な不適応感が引き起こされる可能性が示されたと考えられる。

HL群（配慮優位群）

このタイプは、配慮のスキルが高いがかかわりのスキルが低い学生が分類される。分析の結果、男女ともに承認得点がLH群やHH群よりも低かった。したがって、ソーシャルスキルの活用が配慮に偏っている場合、他者と積極的にかかわり他者を楽しませるような行動が少なく、他者との関係性は静的で受動的であることが予測される。その結果他者から承認される機会そのものが少ないと考えられる。さらに、自己表現や自己主張よりも他者配慮に終始しすぎて、嫌なことを嫌といえずに被侵害・不適応感を抱えていたり、一人で孤立し不安感をかかえている可能性も推察される。渡部（2010）は、他者への配慮が高いほど対人関係において劣等感を感じ、他者との葛藤を生じやすいことを指摘している。したがって、周囲を気にしたり、過剰に相手を尊重することで、自尊感情を低下させ、ますます相手と関わることができにくくなる様相が推察される。

LH群（かかわり優位群）

このタイプは、配慮のスキルが低いがかかわりのスキルが高い学生が分類される。分析の結果、LL群やHL群よりも承認得点や全体的なソーシャルスキルを測定しているKiss18得点が高かった。ただし、女子はLL群よりも承認得点が高いものの、平均値程度の得点であった。

ソーシャルスキルを取り扱った研究においては、ソーシャルスキルが高いほど適応的で、低いほど不適応であるという研究が多くみられるが、それらは単純な相関ではなく、他者の気持ちや雰囲気を配慮する中で、より積極的に他者と関わったり、自己主張が行われることが重要であることを示していると考えられる。

また、女子学生において特にかかわりのソーシャルスキルが高いのみでは、他者から侵害を受けることはないものの、他者からの承認が得られるわけでもないことが明らかになった。女子は男子と比較して他者との良好な関係を築くことに対しての重要性の認識が高いために、自己主張が他者配慮を上回っていると他者から認識されると評価されなかったり、敬遠される要因となるのではないかと考えられる。

以上より、配慮とかかわりの両スキルの発揮の程度により学生を4群に分類し、男女別にソーシャルスキルのバランスを検討することには意義があると考えられる。また、配慮とかかわりの2つのソーシャルスキルがバランスよく発揮できることが学生生活への適応を促すこと、特に女子においてその傾向が高いことが推察された。

3. 小中学生との相違

河村（1999）は、小学生においては配慮のスキルの高さが、中学生においてはかかわりのスキルの高さが、承認感の高さおよび被侵害・不適応感の低さと明確に関連していることを指摘している。本研究から、大学生においては、かかわりのスキルが承認感および被侵害・不適応感に強く関連している一方で、配慮のスキルは弱い関連にとどまっていた。

これらの結果は、児童期と青年期初期、青年期後期という発達段階の違いが関係していると考えられる。児童期には仲間や集団の中で対人関係上の基本的なマナーを身に付けることが必要であり、青年期初期には「配慮のスキル」のような基本的マナーを保ちながら仲間や集団に対して相互的なかかわりを持つという、より成熟したつきあいが必要なため、「かかわりのスキル」が強く関係している（河村、1999）。そして、大学生においては、「配慮のスキル」のような基本的なマナーは当然発揮されるべきものであるため、配慮のみが

高くても周囲からの承認は得られないことが推察される。さらに、配慮やかかわりのスキルの両方が低い場合、その相手とは関わらないという選択肢もあるため、直接的な被侵害とは必ずしも関連していないことも考えられる。したがって、大学生の場合、配慮とかかわりの両方のスキルが低いLL群では特に友人関係の形成や維持の困難さを抱え、それが孤独感につながること、また自分も相手も関わらないという選択肢をとった場合にはそれがなかなか改善されにくい様相も考えられる。

4. 今後の課題

以上、ソーシャルスキルのバランスと承認感や被侵害・不適応感との間に関係性が認められたことから、ソーシャルスキルを学習することは、大学生にとっても不適応に対する予防的・開発的援助の1つの方策になると考えられる。しかし、本研究は2年生を対象としており、その他の学年については検討することができなかった。3〜4年生になると1〜2年生とは異なり、ゼミなどの小集団での活動も多くなる。この所属集団内での活動のあり方によっても、学生のソーシャルスキルは変化する可能性がある。ソーシャルスキルの経年変化については今後の課題としたい。

【引用文献】

相川充　1996　社会的スキルと対人関係　誠信書房

相川充　2000　人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－　サイエンス社

相川充・藤田正美　2005　成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成　東京学芸大学紀要1部門，56，87-93.

橋本 剛　2000　大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連　教育心理学研究，48，94-102.

金子智栄子・平宮正志　2002　高校生の孤独感に関する研究－孤独感とアサーション、両親の養育態度、学校ストレッサーとの関連性　文京学院大学研究紀要4，77-85.

河村茂雄　1999　ソーシャルスキルに問題がみられる児童・生徒の検討　岩手大学教育学部研究年報，61，77-88.

河村茂雄　2010　Hyper-QU（大学版）図書文化社

河村茂雄　2011　専門学校の先生のためのhyper-QUガイド　退学予防とキャリアサポートに活かす“学生生活アンケート”　図書文化

菊池章夫　1988　思いやりを科学する　川島書店

菊池章夫　2004　Kiss-18研究ノート　岩手県立大学社会福祉学部紀要，6，41-51.

文部科学省　2008　学生支援の在り方に関する論点整理　高等教育局学生・留学生課

庄司一子　1991　社会的スキル尺度の検討－信頼性・妥当性について　教育相談研究，29，18-25.

谷村圭介・渡辺弥生　2008　大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係　教育心理学研究，56，364-375.

植村善太郎・小川一美・吉田俊和　2001　大学生の適応過程に関する縦断的研究（2）－大学生の学習への取り組み、および大学生活満足感に関連する要因の検討－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学48，29-43.

渡部麻美　2009　高校生における主張性の4要件と精神的適応との関連 心理学研究80(1)，48-53.

渡部麻美　2010　高校生の主張性の4要件と友人関係における行動および適応との関連　日本心理学会，81，56-62.

渡辺弥生　1994　大学生のソーシャルサポートと社会的スキルに関する研究 静岡大学教育学部研究報告．人文・社会科学篇45，241-254.